メタフォーラ・ファンタジア

（試読用）

十條　実

第三章　　月のかんばせ

　ヘラートの太守は名君とは言い難かったが大層な趣味人で、若い頃客分として暮らしていたニシャーブールの邸の、外廷から内廷に至る壁という壁を色鮮やかな細密壁画で埋め尽くしていた。邸の料理人の数より多くの絵師が雇われ、朝から晩まで絵を描かせた。その題材は、初めの頃は伝説の英雄や戦の名場面だったが、やがて自分の武勇伝を描かせるようになった。といってもヘラートの太守は武人としては三流だった。光彩を放ったのはもっぱら閨房の武勇であり、三人の美しい妻を得たあとは、四人目の妻を一夜ごとに変えて人生を謳歌した。ヘラートの太守となって入城した折は、その壁画をきれいに剥がして運ばせ、新居の壁に移しかえた。絵師たちも一緒に連れて来て、物語絵の続きを描かせた。壁が足りなくなると邸を増築した。
　あるとき四人目の一夜妻を探す係の家臣が一人の村娘を連れてきた。詩編から抜け出たような、輝くばかりの美少女で、城に足を踏み入れた瞬間から誰ともなく「月のかんばせ」との声が上がり、そのように呼ばれるようになった。太守はこれをヌールディン・シャーが薔薇を愛でるように愛でた。一夜妻を探す係がひまになり、三人の妃たちは黒い炎を燃やした。
　しかし月のかんばせの心は晴れなかった。娘はまだ若く、貧しい村に残した家族を案じていた。太守は財宝庫から金貨を取り出して彼女の実家に届けさせた。実家は裕福になったが、月のかんばせは喜ばなかった。名のある楽師や舞人や曲芸師を呼び、夜ごとに盛大な饗宴を催して心を慰もうとしたが、だめだった。月のかんばせは涙にくれて塞ぎ込み、太守の絵師たちは筆を鈍らせた。
　噂を聞きつけた放浪の祈祷師が城を訪れ、月のかんばせの心に巣食う悪霊について語り、その退散方法を太守に告げた。太守はこれを受け入れ、月のかんばせを聖なる祈祷所に閉じ込めて祈祷を行なった。月のかんばせは輝きを取り戻して雲間から顔を出し、月を取り戻した夜空は明るく輝いた――

　青いノートのページが風にめくれるのを手首で押さえながら、コウはペンを走らせた。手を止め、続きを待ったが、沈黙が長い。目を上げて楽師の顔を窺った。
「フショー（以上）？」
　楽師は頷いた。コウはノートの内容を読み返しながらペンの尻で頭を掻いた。
「唐突な終わり方ですね。前半は結構面白かったのに、これじゃあ月のかんばせがどう回復して太守もどうなったのか判らない。悪霊の正体もお妃の一人なのかそうでないのか手掛かりもないし、オチもない。えらく抽象的な結末だ」
「そこは想像の中のお楽しみだ。言っただろう。我々の文化は全部は明らかにしない。隙間の部分は自由に想像していいんだ」
「隙間が大きすぎる気がする」

「とんでもない、これで充分さ。これ以上埋めたら遊びが窮屈になる」
　シャミールは今日もドタールとセタールを携行してチャイハネの露台に胡坐をかいていた。昨日と違うのは、時間が早いので二人の娘たちはまだ学校に行っていていなかった。ハリード老人もいなかった。仕事だそうだ。ちゃんと働いていたのだ。他の客も少なく、昨日見た顔もあるが軒並み老人で、午後になると一仕事終えた男たちがまた集まってくるよと女将が説明した。女将は早い時間から現れた二人を愛想よく迎え、木漏れ日の降り注ぐ一番いい席に二人を座らせると、頼んでもいないのに熱い紅茶と茶菓子を運んできた。茶菓子は平たい皿に山と盛られた大粒のピスタチオだった。
「たんとお食べ。」訛りの強いロシア語で声を掛けながら意味ありげに片目をつぶった。「また鼻血ショーを期待している」という意味に取れた。コウは絶句して、恨めし気に楽師を見つめた。楽師は肩をすくめた。
「いいじゃないか、今日は黒いシャツに変えたんだし」
　そういう問題じゃない。昨日汚した白のシャツは、今朝起きた時にシャミールの母が気付いて、しみ抜きを申し出てくれた。目覚めたとき知らない家だったので驚いたが、シャミールが酔い覚ましのハーブティーを運んで現れ、行方不明と思われるといけないからホテルに電話するようにと勧めた。更に旅費を浮かせたいならチェックアウトしてうちへ泊まれと言ってくれた。願ってもない幸運に礼を述べると、ホテルには行先を告げるなと付け加えた。
「忘れるな、ここはつい最近まで人を監視する国だった」
と囁く楽師の表情は険しかった。社会主義体制の崩壊からまだいくらも経っていない。ロシア人がどの町でも外国人と見ると人懐っこく話し掛けて、その日のうちに家に招くのに慣れていたコウは、初めてのウズベクの町で、人々はロシア人と同じように親しげに話し掛けては来るものの、家に招くまでに至らず別れることに気付いていた。よそ者に対する不信、よそ者の言うことをきいて取り入れた体制に対する不満。同じ旧ソ連といえども内実は異なる。アンディジャーンの暴動はまだ続いている。市民が役場を乗っ取って籠城し、地方政府に対して要求を突き付けていた。水煙管で酔い潰れなければシャミールはコウを泊めたりしなかっただろうか。或いは泊めるために、酔い潰れたという口実が必要だったのかもしれない。
「この話のどこに、アーザーデガーンがいるんですか」
　昨日の話の続きだ。コウはアーザーデガーンの取材を始めることにした。とりあえずはシャミールが知っている分を彼から聞き出す。話と、何より音楽を。
「いるとも言えるし、いないとも言える」
「？」
「アーザーデガーンは、はばかりだ。明言なんかするものか。表面上はどこにもいない。だが話はディテールを欠いている。君が唐突な終わり方と感じたように、話は隙間と謎だらけだ。その隙間にアーザーデガーンは潜んでいる」
コウはノートを読み返した。そこには芸術家としてはまず絵師が出てくる。それに宴会に呼んだ楽師や舞人、曲芸師。この中にアーザーデガーンがいるということか。
「そうかもしれないが、それだけじゃない。祈祷師っていうのも立派な芸人だ。本当に能力があ

ったとすると超能力者の類だから、人間業とは見做されない。それに、意外なところだが月のかんばせも可能性はある。絶世の美女というのは人を惑わす。人間とも思えぬ美貌が芸としてカウントされてもおかしくはない」
　そういうものだろうか。
「同様に、ヘラートの太守もそうだ。そもそも貴人というのは庶民にとって雲の上の人だから、普通の人間とは考えない。自邸を愛欲の壁画で埋め尽くし、一夜妻を食い漁った風流人とくれば、一種の芸人だ」
　そうなんだろうか。そう言われればそんな気もするが、美貌も奇癖も努力と研鑽の産物ではないから、コウの求める究極の芸の保持者という意味からは遠くなる。やはり現代的な意味に限った芸術家の中に、アーザーデガーンを求めたい。
　シャミールはコウの意を汲んで、セタールのチューニングを始めた。シャミールの記憶を頼みにアーザーデガーンに関わる逸話を語らせて書き取り、それに関連ある詩や歌を披露してもらう手はずだった。また昨日のようなみっともない事態になっては困るからと、シャミールの自宅での作業を提案したが、シャミールは外の方がいいと言って退けた。音楽は大勢の人に聴く権利があり、人の往来が多いほど、思いがけず未知の手掛かりが得られるものだと、まっすぐな顔で断言した。
コウは楽師の真正面から見つめる視線をかわして、その鋭利な顔を盗み見た。楽師の顔を眺めたいのには理由があった。いずれ本人に訊くことではあるが、彼の経歴、とりわけ出自については、何やら心ときめく想像があった。イラン人のルームメイトの苗字を聞いただけでそれが名門で、どういう歴史の顔を持つかまで思い至るというのは、よほど事情に精通していなければできない。ウズベクはトルコ系のウズベク人が主流で、地理的にペルシャ文化の影響下にあったといっても国家としてはペルシャ語圏ではない。社会主義の方針で封建時代の歴史は悪者扱いされてきたから、義務教育レベルでは十九世紀以前のペルシャ史を細かく学ぶ機会はない。大学へ進学するか、アラビア文字の時代の書物を読める古式の教養人にでも教わらない限り、知り得ない。民族的にはタジク人であるシャミールは、流暢なロシア語を話しインテリ然とした風格があるが、れっきとしたアーティストなので、おそらくその道の師匠がいて直接芸を学んだ。或いはおとぎ話みたいだが、シャミール本人が古のペルシャ貴族の子孫かもしれない。コウは楽師自身に対する疑問は封じて、別のことを訊いた。
「ヘラートの太守は、どうして妃を三人までしか取らなかったんだろう。イスラムでは妻を四人まで持っていいんでしょう？」
「ああ、四人までなら許される。だから妃は三人なんだ。四人目の妃をとると、それ以上は姦淫になって名誉にかかわる。だが一城の主ともあろう男がたった四人の女で満足するわけがない。だから四人目の妻の座を空席にしておいて、次々女を座らせるのさ。イスラムでは離婚は禁じていないから、毎晩新しい妻を迎えて朝までに離婚するという仕組みだ」
「すごい発想ですね」
「普通だよ。アラブの王族などは今もそうやって、毎晩四人目の妻と結婚離婚を繰り返している。歴史の知恵だ」

「旧ソ連のここは、一夫一妻が定着したんですね」
「社会主義で重婚ができなくなった。代わりに愛人を別の場所に持つ習慣ができた」
　コウは驚かなかった。日本も戦前は妾を囲う習慣があったし、今でも不倫は街中に氾濫している。どの国も大差ない。人間は大差ない。
「飲酒の扱いもそうだ。我々は社会主義を長くやってロシア人のウォッカがぶ飲みに馴染んだからアルコール摂取に何のためらいもないが、よそでは飲酒を禁止している国もある。それでも飲みたいからどうするかというと、聖典(クルアーン)で禁じているアルコールはワインのことだからと、ビールやコニャックを飲む。ウィスキーやサケでもいい。ワイン以外なら罪にならないという解釈だ。詭弁だが、字義通りにはそうだ」
「そんなに飲みたいなら、我慢しないで飲めばいいのに」
　楽師は低く声を上げて笑った。
「古来より詩人は酒を讃える詩を多く詠んだ。当時だって飲酒を不道徳とする社会通念はあったのに、それを破る者を大目に見る心の余裕もあったんだ」
　いまの世は生きにくい、と節をつけて短く歌った。楽師は準備が整ったようだった。コウは日本から持参した録音機のスイッチを入れた。一陣の風が吹いて、楡の街路樹の緑の葉が一斉に裏返った。木陰で将棋を指す老人の手が止まった。
　楽師の腕の中でセタールが振るえ、艶のある歌声に絡まり、すがり付いた。音楽は風に乗って流れゆき、街路を抜けて市場を巡り、路地にしゃがんで砂絵を描く子供の前髪を巻き上げながら乾いた青空へと滑り出ると、ぽっかり空いた市街地の上空から、歴代のハーンたちが起居したブハラ城の巨大な城壁に、砂塵と共に降り注いだ。

＊

　絵師サリムはため息をついた。筆がはかどらない。描いても描いても不毛な作業に終わるのが堪らなく苦痛だった。毎日毎日この壁に向かって描き続けている。一体もう何年がすぎたのか判らない。仲間の何人かは逃げ出し、あるいは病気になった。目の病だ。絵師にとっては致命的だが、薄暗い邸の回廊でこうも長期間休みなく働かされたのでは、目が光を拒むようになっても不思議はなかった。サリムは梯子から降りると、目頭をつまんで揉みほぐし、首と肩をぐるりと回してから目を開いた。
　終わらない風景がそこにあった。城主の人生そのものが。
王の曾孫に生まれた貴公子は、幼少時に不遇の人質となって他国の城で成育した。その血筋の確かさから多くの貴い男女が貴公子の周りに蜜蜂のように群がり、貴公子は王家の尚武の気質を受け継ぐことなく、享楽の人生を歩み始める。
王族らしく気前よく金貨を振り撒いたから、評判は悪くなかった。壮年になってヘラートの太守に任じられた時は、土地の者たちも吝嗇な先代太守に代わって良い世が来るものと期待した。その期待は早々に打ち砕かれたが、新任太守は少なくともケチではなく、やり方をわきまえればその財宝庫から金銀を吸い出すことはそう難しくはなかった。太守はおだてに弱く、情にもろか

った。
放恣な私生活は貴族の嗜みとばかり、ありとあらゆる娯楽を試したが、際立っていたのは絵画への関心だ。名だたる絵師や細工師を各地から呼び寄せ、邸や調度を一流の趣味に飾らせた。若い頃は自ら筆をとって細密画を描き、美しい妃たちを宝石箱の蓋の中央に繊細な筆遣いで描いては、本人に贈っていた。
しかし時は無残なもの。太守の贅肉がもはや乗馬を不能にせしめた頃には、妃たちの自慢の美貌も失せていた。太守は自ら絵を描く喜びを失い、慰みに絵師たちに邸内に隙間なく壁画を描くよう命じた。
「美しいわが世を描いてくれ」
難しい注文だった。絵師たちは若い頃の太守も妃も見たことがなかったから想像で描いたが、似ていなかったので主たちの気に入らず、描き直しを命じられた。気性の荒い第三夫人は、盥に墨水を汲み、いやがらせのように描いたばかりの壁にぶちまけた。絵は汚され、左官を呼んで白い漆喰を一面に塗らせてから、再び筆を立てる。絵が完成する。また墨をぶちまける。この繰り返しが、もう何年も続いていた。
絵師サリムはため息をついた。この堂々巡りの宮仕え生活に、しかし突如として変化が生じた。太守の風流心を満たすために一夜妻が選ばれる行事は、以前から行われていた。太守の息子たちはとうに成人し、王家の一員として辺境で軍務に就いていた。太守はいたって健康だったが、もはや子種は残しておらず、妃たちの許可を得て一夜妻を慰んだ。一夜とは通称であって、実際は数日から数週間の妻であり、その婚姻には儀式も金もいる。臣民は花嫁の持参金を免除されたから、太守の蔵から一方的に結納金と慰謝料が支払われた。臣民は喜んで娘を差し出したが、娘は悲嘆に泣き暮れた。その様子も壁画の題材となって、絵師の良心を痛めつけた。
　そんな中、月のかんばせが現れた。雲間から月が顔を出すとはまさにこのことだった。暗く澱んだ邸内は文字通り月を得たように明るく輝き、瞳をめぐらせば門番から風呂焚き奴隷までが将棋倒しの駒のごとくひれ伏し、視力を弱めた老齢の絵師は白目の濁った目を見開いて、感激のあまり視力が回復するか、悶死した。美少女を探し当てた家臣を昇格させた太守は、美しい村娘を都の流行で飾り立てるよう命じ、盛大な婚礼を催すことを決めた。
こうして第四夫人の座がとうとう確定したと周囲は認識した。第四夫人ともなれば、内廷では太守に次ぐ権力者である。イスラムでは四人の妻を平等に扱わなければならず、第四夫人が前の三人の妃に引けを取るということはない。一同は月のかんばせが横暴な第三夫人らを牽制することを期待し、そう仕向けようと画策した。サリムは素描を口実に、月のかんばせと二人で面会する許しを太守から得た。第三夫人の墨攻撃を阻み、不当な描き直し命令も撤回させることができれば、この不毛な日々を終わらせて家族の元へも帰れよう。
期待に胸を膨らませた絵師は、夢が打ち砕かれる音を聞いた。なぜなら月のかんばせは、幼かった。十五歳というのは嘘だった。本人は月の微笑みを絶やさずに、本当は十二歳だと打ち明けた。跪いた絵師に向かって、美少女は更に信じられないことを言った。
――赤い絵具がほしい。
　それは、五日後に控えた婚礼の夜に、どうしても新妻が周囲に示さねばならぬ義務だった。月

のかんばせは泰然として、今までの娘たちのように泣き叫んだりはしなかったので、既に諦めたか達観しているのだと思っていたが、違うのか。しかしいくら子種が尽きたといってもその気の太守の手を逃れ、欺くことは無理だった。城に入った時点で、娘の純潔はなくなることが決まっていたし、仮に一晩凌いだとしても、あの太守の入れ込みようでは当分離縁しないだろうから、勝負は時間の問題だ。少女には可哀相だが、一夜妻の捜査官の目にとまった時に既に運命は決まったのだ。
――ちがうのよ、絵師サリム。
　月は絵師が目を疑うほど大人びて微笑み、手招きした。絵師は月の光の眩しさに目を細め、白いかんばせとふくよかな唇が、うろたえた自分の顔の目の前に迫るのを、息を詰めて凝視した。
――……。
　サリムは驚愕し、両手を床について身を支えた。月のかんばせは平然と眺め、妻子を実家に残しているという中年男を見下ろして魔女のようにせせら笑った。動転する絵師から、赤と黒の絵具と小さな水差しを奪い取ると、月は優雅な足取りで自室に去った。良識ある絵師は世の乱れを嘆き、祈祷室に籠って神の叡智にすがった。
　月のかんばせの取込みに失敗したサリムは絵師たちに責められたが、どういうわけか翌日は第三夫人の姿が見えず、増築の工人も支払いを済ませて去っていった。恋に目の眩んだ太守は、いま製作途中の絵をすべて塗り潰し、月のかんばせとの婚礼風景を描くよう指示したきり、壁画に口を出さなくなった。
　絵師サリムはため息をついた。彼の担当に割り当てられた回廊にわずかに切り取られた格子窓から、陽気な笑い声がさざめいた。顔を寄せると、中庭の噴水を囲んで女たちが朗らかに談笑している。その中の一人に、サリムは陶然とした視線を向けた。
――ハミーシェ。
　「久遠(ハミーシェ)」と呼ばれるその娘は、婚礼の祝宴に雇われた技芸団の舞人だった。
美しかった。月のかんばせは光り輝く美貌だが、ハミーシェは、賢者が庵を結ぶ園に湧く泉だった。手足がすらりと長く、糸杉のように細くしなやかだった。大きな目はいつも伏し目がちで、胸に巻いた恥じらい帯を気にして指先で形を整える姿が秀麗だった。恥じらい帯は、華美を嫌ったシャー・ロスタムの時代に流行った貴婦人の嗜みだ。当時胸の大きな女性は敬遠され、美を競って長布できつく巻く習慣があった時に発明された。その後享楽好きな王が立って廃れたが、最近都で復活したと聞くから、彼女は都の最新の流行を取り入れているという証になった。あの細い体の中に豊満な乳房が窮屈な姿で押し込められているかと想像するたび、サリムは妻に対して申し訳ない思いで一杯になったが、ハミーシェを目で追うのをやめなかった。邪な妄想を差し引いても、絵師は純粋に、あの舞人の麗姿を描きたいと思った。舞人はつややかな鏡石で囲んだ噴水の淵から優美に立ち上がると、クルリと一回転した。彼女の前には象牙色のターバンを巻いた楽師が腰を下ろし、舞人を見上げて頷いたり首を傾げたりしながらセタールを掻き鳴らす後ろ姿が見える。舞台の打合せをしているらしい。
絵師は楽師にささやかな嫉妬を抱いた。しかし職業柄、あの楽師も絵になると値踏みし、観察した。楽師というのは見た目に硬質で大ぶりの楽器を抱いているせいか、構図的に絵になる。座

長とおぼしき肥えた女と話すときに顔の向きを変えるので、その鋭い鼻梁と、珍しい青い眼が見てとれた。座長が早口に捲くし立て、ハミーシェと他の舞人たちを並ばせて振付けを指導した。技芸団が稽古する内廷の反対側では、城の守備兵が剣を抜き、練兵に励む声が聞こえていた。
五日後、盛大な婚礼が催され、各地から高貴な賓客が到着し、城下の民にも食べ物と酒が振る舞われた。技芸団は邸の広間で歌舞を披露し、太守と花嫁を祝福して薔薇の花びらを地面が見えなくなるまで振り撒いた。太守は満足気に贅肉を揺らしながら、金貨と銀貨を惜しげもなく投げ与えた。城の内外はめでたい空気で満たされた。

占い師が現れた。近頃城下で評判の占い師で、太守は興味を惹かれて内廷に招き入れ、花嫁との運命を占わせた。占い師は厳粛な黒のチャドルで顔の周りを覆い、その三角に切り取られた白皙は、額に埋め込んだ大きなエメラルドと、光彩のない漆黒の両眼が際立ち、ヒンドの三つ目の神像を思わせた。

孔雀石の数珠を手の中で繰りながら、聖典を吟じ始めた占い師は、やがて全身をわななかせると、神を讃える文句を三回唱え、迷わぬ動作で月のかんばせを鋭く指差した。獣のような声で占い師が捲くし立てると、月のかんばせは悲鳴を上げて立ち上がり、葡萄酒の入った水差しを両手で持ち上げると、力いっぱい床に叩きつけた。真っ赤な葡萄酒が花嫁の純白の衣裳に飛び散った。赤い液体に足を浸した月のかんばせは憤激し、驚く花婿の腰に差した装飾用の短剣を引き抜くと、目にもとまらぬ速さで占い師に投げつけた。間一髪、短剣は長剣にはじかれた。剣舞を舞っていた舞人が、騎士顔負けの絶技で刃傷沙汰を回避したのだ。

婚礼は穢された。月のかんばせは泣き叫んで占い師を糾弾したが、占い師は太守に向き直ると、禁忌の期間になされた花婿にあるまじき行いを責めた。太守が絶句して否定しなかったので、美しい舞人に衆人の視線が突き刺さった。参列者の占い師に対する非難は、太守と舞人へと向けられた。たった今流血の惨事を防いだばかりの舞人は、両手で顔を覆って退席した。参列客は立ち上がり、城は騒然となった。

世間の批判をかわすため、月のかんばせは精霊憑きということになった。祈祷師が呼ばれ、日夜勤行に努めたが効果はなかった。婚姻前に花婿に侮辱された花嫁は機嫌を損ね、太守は国庫を捻出して結納金を倍増した。金貨は直ちに花嫁の実家に届けられたが、花嫁の家族は納得しなかった。更に使者が立って、金貨を運搬した。家族は承諾しない。果てしない往復運動が繰り広げられた。

花婿の不実の相手である舞人は城に据え置かれた。身分のない娘は貴人の求めを拒めないから、責められることはなかったが、彼女の所属する技芸団の座長は、これから売り出す花形の評判に疵をつけたと太守を責め、賠償を求めた。通常の宴なら何でもないことだが、よりによって花婿を寝取ったという経歴は不名誉を極めたし、今後技芸団そのものが婚礼での仕事をもらえなくなる可能性が高かった。座長は祝儀を受け取らず、数名の屈強な用心棒団員と共に城に居座った。

絵師サリムはため息をついた。麗しの久遠の君は、いまや泥にまみれた淫売となった。舞人は邸に軟禁となり、サリムはそのはかなげな麗姿を間近に見る機会に恵まれた。舞人は美しさを損なってはいなかったが、花のかんばせから微笑みが消え、精緻なガラス細工のような硬質な表

情が回廊を行き交い、列柱の陰に佇んだ。絵師は久遠のために涙を流し、なすすべなくその姿を追ったが、近付こうとすると技芸団の座長か用心棒が鬼のような形相で立ちはだかり、追っ払われた。
婚礼が台無しになったので、絵師の仕事はなくなった。絵師仲間は城を出た。サリムは次の仕事を探す当てがなかったので留まり、長く伸びきった回廊に一人残って、架空の饗宴の壁画を描き続けた。城内の空気は重く、張りつめていた。
ある月夜の晩、絵師はもの悲しい音楽の調べに導かれて、夜風の吹きすさぶ城壁に上がった。手をかざして砂塵から目を守りながら瞳を凝らすと、そこには麗しのハミーシェが青い舞台衣裳を翻しながら静かに舞っていた。風に運ばれて音楽が流れてくるが、楽師の姿は見当たらない。舞人の右手には抜き身の長剣が握られ、鋭い刃先が翻るごとに月光が蒼く反射した。突き、払い、切り下げる。風と砂塵に逆らわず、流れるような所作は斬り結ぶ月の光と拮抗していた。信じられないほどの調和だった。先日の穢れた婚礼で見せた舞とはまるで違っていた。絵師はもっと近付こうと試みたが、足が動かなかった。世界から音が消え、風も消え、視界を妨げる砂塵が消え、自分の呼吸も消え、手足の感覚も消えた……。
死の国のような蒼白い剣先が月の下で弧を描き、舞人の華奢な腰に提げた細鞘に収まった。絵師は呼吸を取り戻したが、まだ動けない。舞人は振り向いて城壁の淵へ寄った。驚いたことに、そこには先刻からいたのだろうか、月のかんばせが、花嫁衣裳の胸元を握りしめて立っていた。風に煽られよろめきもせず、金糸の靴を履いた足元のすぐ後ろは奈落の闇。二人は対峙し、何か語り合っている。
満月を背後に従えた月のかんばせは気高く、誇りに満ちていた。初対面の時に絵具をせびった娼婦のような表情も、婚礼の日に見せた気狂いの相も、そこにはなかった。誰もが勘違いしていた。月のかんばせは、文字通り月の人。穢れた地上に遣わされた神の国の使者だった。その証拠に、美貌の舞人が膝をついた。頭を垂れ、臣下の礼で剣を置き、白い腕(かいな)を差し出した。月の人は幼い両手を伸ばして舞人の手を取った。その小さな手首の内側は、細かな切り傷で一杯だった。舞人は立ち上がり、その切り傷に口づけし、小さな主君を抱き寄せた。闇夜にくっきりと浮かぶ巨大な満月の冷たい光の下で、久遠と月は抱擁した……。
　翌日から絵師はとり憑かれたように壁画に没頭し、久遠と月をテーマにした膨大な量の作品を描き上げた。ヘラートに新しく入城した君主は、それを見て驚き褒めたたえ、絵師に「天下一流」の称号を与えた。その奇跡の技をひと目見ようと、多くの識者が城を訪れたが、前城主の趣味の壁画をひとつ残らず塗り潰して描き上げた物語が完成するや、絵師は忘我の人となって荒野へ消えた。絵師が残した月のかんばせは、昏い闇の人の世に一条の光明を恵み、久遠は恥じ入って顔を覆った。ヘラートの城はその後シャイバーニー・ハーンの軍勢に攻められ、壁画もろとも炎上した。

＊

「ナショール（わかったか）？」

　絵師のさまよう忘我の荒野から引き戻されて、コウは目を開けた。
「アーザーデガーンが誰だか、わかったか？」
　現代の楽師は楽器を抱いたまま、女将が新しく淹れてくれた紅茶をひとくち啜り、歌で乾いた喉を潤した。
「……多分、絵師でしょう」
「ちがうな、絵師は名前が出ていただろう」
　確かに、サリムとかセリムとかいう固有名詞が数回聴きとれた。
「じゃあ、舞人……だめか、舞人も名前が出てきた」
「いや、正解だ。この話は舞人とその楽師がアーザーデガーンだ」
「え、楽師も？でも舞人のハミーシェは名前でしょ」
「ハミーシェは永遠という意味だ。現代語にもあるが、昔は舞人によくある人気の芸名だった。ハミーシェと言えばすぐ舞人が連想される。だから固有名詞とは言い難い」
　うーん、とコウは首をひねった。
「やっぱりよくわからない話ですよ。前半は結構ディテールが細かいのに、なんで最後の方になると話がぼやけて駆け足になるのかな」
「歌う方だって疲れてくるんだよ。声が擦れて来れば、終わりを急ぐのは当然だろう」
　コウは驚いた。歌い手の疲労具合で物語が伸びたり縮んだりするというのか。ではせっかく今通して聴き、歌詞を書き取り、録音までした貴重な資料は、シャミールの勝手な短縮版だということか。コウは抗議の声を上げた。楽師は制した。
「いい加減、学べ。我々の文化は隠喩を好むと言っただろう。後半のストーリーが曖昧なのは、理由がある。「はばかり」だ。土地の支配者が悪者だと、面と向かっては語れない。過去の歴史上の人物だからといって、その子孫や仇が今も近くにいないとは限らない。用心に越したことはない。明確に示さなくても伝える術はある。多分君が見落としただろう暗示と隠喩を、種明かししてやろう」
　コウは姿勢を正し、青いノートのページを改め、ペンを握った。
「この話は、戦さの話だ」
戦さ？どこが？
「城内の兵士が練兵するくだりがあるだろう。あれは戦さの準備だ。後半の曖昧な表現は、そこに憚(はばか)りある戦役があったことを示している。戦さなんて権力者たちの道楽みたいなものだから、戦さを起こす理由に正当なものなどありはしない。だが庶民にとっては迷惑で忌むべき現実だ。城下で略奪が起きるからな。庶民は遊興代わりに戦争を起こす支配者たちを非難しているが、大っぴらにはやれない。だからこうした婉曲な表現で言い伝えることになる。ヘラートの太守はおそらく本当に暴君ではなかったのだろうが、遊興が過ぎて財政が傾いた。その原因は女遊びかもしれないし、過度の壁画熱かもしれない。いずれにしても高額の出費がかさんで、それが外に知れた。戦さの口実さ。本当に敵国が攻めてきたともとれるが、ありえそうなのは、彼を太守に任命した王や宰相が、浪費家の道楽王族を引退させたかったんだろう。成人した息子が手元にいないというのがそれを匂わせるし、第三夫人が墨水を壁画にぶっかけるシーンがあるのは

、引退勧告に来る王の使者を追い返したという暗喩だ。身内の恥というわけだ。月のかんばせは、そんな聞き分けのない老いぼれ王族を権力の座から引きずり下ろすために遣わされた間者だ。どういう手段を使ったか、まさか話の通り色仕掛けとも思えないが、とにかく残り少なくなったヘラートの金庫から、これ以上のばかな出費を抑えるために、徐々に財を城外へ流出させて救済した。金がないから城は雇い人を養えず、人々は戦さの前兆を感じ取って城から逃げていく。月のかんばせは、もしかしたら太守の征伐を命じられた王家の一員かもしれない。グルの舞人が臣下の礼をとっているからね。月と呼ぶからには、本当に美貌で、明晰な頭脳の持ち主だったのかもしれない。まあこの辺は自由に想像するさ。そう、月のかんばせと舞人はグルで、だからターバンの楽師もグルで、当然技芸団もまるごとグルだ。あと占い師も。占い師は婚礼の宴をぶち壊しておきながら、捕えられもせずいつの間にか消えている。おそらくその素性を語っては畏れ多い、何らかの権威者による弾劾を意味しているんだろう。黒のチャドルと、額の緑のエメラルドが、宗教的権威を暗示している。ヘラートの太守は籠城し、助命を請うて何度も使者を遣わしたが、屈強な用心棒、つまり王の兵士に阻まれてうまくいかない。ついに決戦を決意し、戦火を開く。舞人が城壁の上で物騒な剣舞を舞っているのがそれだ。満月、満月と重ねて言うから、落城まで一か月かかったのかもな。月のかんばせは久遠の舞人と協力して功績を上げ、共に凱旋入城する。ヘラートの太守は恐らく死んだ。こういうことは明言しないのが礼儀だ。そして月と久遠はしばらくの間、うまく領土を治めたようだが……」

　シャミールは言いよどみ、紅茶を口に運んでひと呼吸おいた。

「舞人はその後失脚する。それか早死する。とにかく不名誉があって、歴史のはばかりとなった。最後のシャイバーニー・ハーンによるヘラート攻略は史実だが、二人の壁画が炎上して跡形もなくなったというから、舞人のみならず月のかんばせもその後憚り扱いになったらしい。そういう意味で月のかんばせもアーザーデガーンと考えてもいい。でも多分、この人は知恵の働く、誇り高い武人だよ。胸に手を当てて誠(まこと)を示しているし、葡萄酒の海が暗示する流血を踏みつけているからな。十二歳というのは、十二イマーム教団が関係している。暗殺集団(アサッシン)がらみだ。知っているだろう？」

「……」

　コウは言葉がなかった。こんな話は見えてこない。隠喩にもほどがある。コウは外国人だ。不案内な外国語の歌詞に出てくる文言からここまで連想するのは無理というものだった。コウは両手を後ろについて天を仰いだ。自分は途方もない作業を始めてしまったのではなかろうか。それとも自分の想像力が貧弱なだけなのか。

「ねえ、いまの解釈、もしかしてあなたの勝手な創作ってことはないの？」

「ああ、そういう可能性も十分ある」

「！」

　コウは今度こそ激昂しかけたが、シャミールは厚い目蓋を微動だにせず、「興奮するとまた鼻血を出すぞ」と相手の気勢を挫いた。コウは赤面し、チャイハネの厨房で女将が遠慮なく笑う声が聴こえた。笑われたコウを気の毒に思い、年長者は折れた。

「すまん、冗談だ。創作はしていない。ペルシャ語のネイティブならこの程度は普通に思い当

たる。隠喩はもっと隠れている。いちいち数え上げていたらきりがないくらいだ。今語ったのは、オーソドックスな解釈だ」
「……ぼくはこれでも大学院生です。来年は論文を書かなきゃならない。現地まで行って集めた資料が全部創作でしたなんて、いくら日本の学会でも通してくれないよ」
「ここへ来る学者は皆そう言う。確かな資料を出せと。だが口頭で伝わる伝承に、一字一句の正確さも何もあるか。一体誰がどうやって証明する。二つ以上の史書に記載があるかないかなんて。その史書が真実を伝えているとどうやれば判る。二つとも間違っていたら、その平均値だって間違いだ。誰にも判らないよ。文字になったものがあろうとなかろうと、初めから文字じゃなかったんだから。声だったんだ。歌だったんだ。歌は真実の貞淑な妻ではない。ただ美しいことを語り継ぐための道具だ」
　楽師の言うことはわかる。伝承は数学ではない。音楽は数式ではない。答えが一つである必要はなかった。正しく知り、伝えたいと思うが、答えが十あるのなら、そのすべてが正解だった。ならば自分はその正解のすべてを自分の中に収め、消化しなければならない。
気の遠くなるような道のりだが、意欲が失せたわけではなかった。コウは楽師を見た。まっすぐに視線を返すシャミールは、コウの想像する以上の知識と見識を備えた理想的な先生で、その長い行程を共に歩むのに協力してくれそうだし、何より一一声が良かった。この声と彼の長い指が紡ぐ繊細な弦の響きを延々と聴きながら作業するなら、何十年かかっても構わない気がした。
「節回しの解説をお願いしても？」
　ああ、と楽師は快諾した。同じ詩句の節回しも、伴奏する楽器の旋律も、いくつかバージョンがあった。高音が続いたり、抑揚の振れ幅が激しくなると、場面や人物の心情が盛り上がっていることを暗示した。例えば舞人ハミーシェが胸の恥じらい帯を整える詩句では、平らに歌うと素通りできるが、擦(かす)れるように喉奥を鳴らしてビブラートをかけながら、弦をやや乱暴に下から掻き上げると、瞬間的に恥じらい帯がほどけ、柔らかい肌の下で心臓が熱く息づく像が脳裏に浮かんだ。コウは右手を上げて制止を求め、俯いた。楽師はフンと鼻で笑って手を止めた。「修業が足りないな」と目が揶揄していた。
「子供扱いしないで下さい。それにひ弱でもないです。これでも剣道三段です」
「ケンドー？」
　日本のフェンシングだと言うと、アーと合点がいったらしく背を伸ばした。
「ジュードー、ケンドー、アイキドー」
「そう、そう」
「ブシドー」
　ちょっと違うが、コウは惰性で頷いた。
「君は武士の子孫か」
「うん……まあそうです。でも今は武士の子孫でなくても剣道を習ったりしますよ」
「舞人が剣を振るうシーンに何か感じたか？」
　楽師は弦を鳴らし始めた。先程聴いたフレーズが再現され、婚礼の席で「シャープール王の勝利の剣舞」を優雅に舞うハミーシェの姿が浮かんだ。楽師は一度止め、「もうひとつの弾き方」

と断って主旋律は同じ、別バージョンを奏でた。
　恐ろしい風景だった。殺伐とした空気が壁のすみずみまで張り詰め、隙を見せれば一撃で貫かれる。油断ができない。動けない。動けば殺すと脅されているようだ。月のかんばせが老いた花婿の短剣を抜いて投げつける。いや、これは短剣どころではない。もっと長い長剣か、槍ではないか。しかも一本じゃない。何本も向かってくる。なんと、舞人は剣を切り結んで大立ち回りをしているではないか。コウは頭上を飛んでくる槍や剣先をよけるように、思わず首をすくめた。
　ふっと場面が掻き消えると、今度は城壁に青い衣裳の舞人が立った。無駄な肉のないすっきりした肢体が、隙のない動作で旋回し、月の光を剣に反射させて煌めいている。城壁の下に軍馬の嘶きが聴こえる。先の舞人の大立ち回りと同じフレーズが力強く繰り返され、舞人が単身で血路を開いた後を、導かれるように軍勢が押し通っていく。舞人は軍勢を指揮しているのか？ではこれはもはや、か弱い娘ではない。一人の勇敢な騎士である。楽師の爪が鋭くとがり、邪悪な生き物のように高速の歯車となって音階を一気に駆け上がった――。
「ナショール（気付いたか）？」
「……ナショール（気付きました）」
　コウは圧倒されて言葉を失ったが、楽師は満足そうだった。隣の露台から拍手が上がった。水煙管をふかしていた二人の老人が、偶然隣り合わせた席から思いもかけぬ妙技を味わうことができたことに、感動と謝意を示していた。あの老人たちにも見えたのか。城を取り囲んだ軍馬のうごめきと、颯爽と剣を抜き持つ騎士の勇姿が。
　機械の止まる音がしてコウは我に返った。録音スイッチが上がっていた。シャミールが一服しようと言って女将を呼んだ。一つの詩について、彼の演奏を通しで一回録音すれば済むと思っていたが、これではテープがいくらあっても足りない。きっと何通りもバージョンがあって、それぞれ描いている風景は違う。なんという芸術だ。
　空きテープを持ってきていなかった。日はまだ高いが今日はもう終わりにしましょうかと申し出ると、楽師は首を振って舌を強く鳴らした。
「やっと調子が出てきたところなのに」
「すみません」
「ちがう、君のことだ」
「ぼくの？」
「耳がついてくるようになってきた。昨日は官能の旋律しかキャッチできなかったのに、今日はもうそれ以外の情景にもピントが合ってきている」
　昨日まではエロ脳だったが、今日は進化して周囲が見えるようになったらしい。コウが憮然と沈黙すると、また舌打ちが鳴った。しかし楽師は上機嫌だった。
「録音は不要だ。耳があるんだから耳で聴け。ここに」
　まっすぐ正面から見据え、さっき超人的な速さで回転しながら四本の弦を掻き込んだ長い指を突き出すと、拳銃のようにコウの心臓に突き立てた。
「ここに、直接入れるんだ。まっすぐに。混じり気なしで。続けるだろう？」
　楽師はほとんど脅していた。青い眼の縁どりの中の黒い瞳孔が開いている。背の高い彼の背

後に、オアシスの乾いた青空が遠くに縦に広がっている。なすすべなく、しかし幸福な気持ちでコウが同意すると、楽師は稀少な玩具を手に入れた子供のように喜んだ。隣の露台の老人たちも、囃すような若やいだ歓声を、しわがれた声で上げた。

※この作品は第二十四回日本ファンタジーノベル大賞の一次選考通過作品の抜粋で、本編第三章「月のかんばせ」を冒頭から八割程掲載したものです。全編ご覧になりたい方は、本編をご購読下さい。なお以下のアドレスへ問い合わせて頂きますと、特典割引で購読できます。
jmetaphor@excite.co.jp

本編　目次

第一章　　銀の針穴
第二章　　吟遊詩人
第三章　　月のかんばせ
第四章　　王の狗
第五章　　秘曲『殺天位』
第六章　　王は滅び、詩は残る
第七章　　知恵の泉
第八章　　近来の客、遠来の客
第九章　　予感
第十章　　モハーレフ（対立拮抗）
第十一章　シェキャステ（崩壊）
第十二章　うたい初め
第十三章　ラディーフの継承